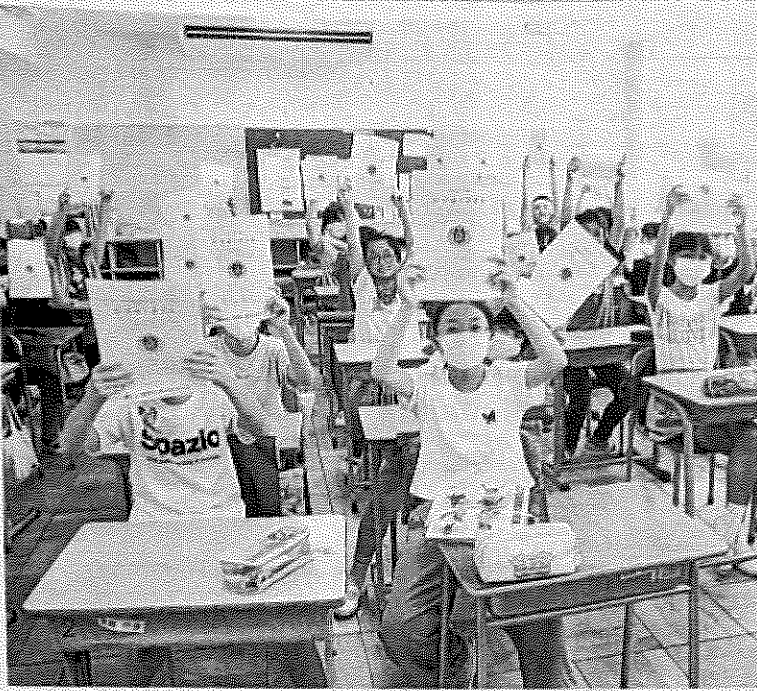


夏休み短く

下校は早く

立川市幸町の市立第八小で31日、市内では最も遅い終業式が行われ、都内のほとんどの小学校より10日ほど遅い夏休み入りとなった。夏休みの日数を削減することで、通常期間の授業にゆとりを持たせると同時に、教職員の働き方改革にもつなげようとする独自の取り組みだ。(小沢勝)

立川市立第八小で終業式



◆放課後にゆとり

この日は終業式の後、各クラスで通知表が渡され、児童らは「やっと夏休みだ」と歓声を上げた。「夏休みの学校がうらやましかったけど、その分、いつもは早く帰れるようになったから良かった」と納得した様子だった。

英語など教科が増えたため、現在の小学校では高学年を中心に毎日6時限の授業が通常となっている。児童の下校は午後3時30分から1時になる。「児童も教師も放課後のゆとりがまるでない」と考えた蔵重佳治校長(60)が、10年以上前から温めていたアイデアを今年、実行に移した。「7月いっぱい暑い中での授業は無理だと思っていた。空調が整った今ならできると説明する。」

同小では今年4月から月、水、金曜日には5時限授業。児童は午後2時30分には下校する。削減する6時限目の分を、通常の夏休み期間中(7月21日～31日)に補填することで対応することにした。

▲もったばかりの通知表を掲げて夏休み入りを喜ぶ6年生の児童ら(31日、立川市立第八小)

休み削減で時間確保 ▶ 週3日は5時限授業

◆保護者ら前向き

実施にあたって同小は地域の学校運営協議会の了承を受けた後、3、4月に保護者会への説明を実施。取り組みへの理解を求め、7月いっぱい休みの取り方は各家庭の判断に任せた。疑問の声はなく、休みを希望する家庭はなかったという。

同小に4、6年生の息子を通わせる天野清二さん(46)は「保護者の間では積極的にとらえてくれる人が多い。ただ、ゆとりができて居場所のない児童がいること、本来、夏休み期間となる時期の給食提供など課題もある」と話した。

この取り組みに対し、「授業への準備、校務作業などに打ち込める時間が増えた」と酒井光次教務主任(41)は話す。他校の教師と話す際に「どうやって実施できたのか」と質問攻めになるという。「今後もぜひ続けたい」と語った。

同小では12月に制度のあり方について保護者にアンケート調査を実施する予定だ。同市教委の斎藤真志教育部長は「この取り組みは都内でも例を見ないものと思う。児童や保護者、教職員らの理解のもとで円滑に進められるよう期待し、状況を見守りたい」と注目した。